

◆【海員随想】 同級生② 及川帆彦

私が船員になったのは、小学校のときの同級生と再会したのがきっかけであった。戦後2年目の夏、私は海軍の作業服を着ていたが、小柄な高橋は水色の背広を着ていた。「背広なんか着て、景気がよさそうじゃないか。何をやっているんだい？」「俺か？俺は船に乗っているんだ、船乗りだよ」

彼の語るところによると、終戦の前年の5月に、中学を中退して船員になった。戦時中は危ない目にも遭ったが、命だけは無事に終戦を迎えた。戦後は内地航路の貨物船に乗っており、今は休暇で帰省中だという。

どんな職業に就いたらよいかと迷っていた私だったが、船員というのは全く考えてもみなかった。そうか、船員という職業があったか、という感じであった。

私は彼に自分の現状を話して「参考までに船員のことをいろいろ聞いてみたい、君の家へ行ってもいいかね」と聞いた。

「ああ、いいよ。夜なら家にいるから」

「そうか。休暇はいつまでだね」

「後10日ぐらいだ」

高橋の家には3度訪ねた。そして船や船員のことをいろいろ聞いているうちに、自分も船乗りになろうか、という考えを持つようになってきた。考えてみれば、海軍にいたとき、船には乗らなかったが、手旗信号や短艇の訓練もやったし、結索も習っている。

「船員になるのだったら、できれば海員養成所（後の海員学校）へ行った方がいい。自分では行かなかったが、そのためにいろいろと苦労をしたからね。

本当は甲板部希望だったのだが、視力が及落すれすれのところだったのと、体が小さいために司厨部に回されたよ。戦争中であつたし、司厨部の希望者が少ないこともあって、強制的に司厨員、つまりボーイにさせられたんだ。海員養成所に行けば、船員としての基礎的な知識や技術を教えてもらえるから、就職に関しても、乗船してからも、それだけ有利になる。海員養成所の生徒の募集は、今、年に2回やっている。春と秋だ。養成期間は1年。ここからなら宮古が近い。岩手県の宮古だ」と高橋は言った。

船員になりたいという考えを、父と兄に話したところ、サラリーマンの父は首を傾げたが、大工の兄は賛成だった。そして「1年ぐらいなら、学費は俺が出してやってもいい」と言ってくれた。

「海員だより」